令和4年度　群馬県立農林大学校評価システムシート

R5.3.14

目指す学校像	群馬県農林業の多様な担い手育成
重点方針	1　質の高い教育の実行 2　実績の上がる学生募集の実行 3　実績の上がる進路指導の実行 4　県民の期待に応えられる研修の実行

達成度		
	A	100%
	B	80%以上100%未満
	C	60%以上80%未満
	D	60%未満

番号	重点項目	現　　状	評　価　項　目	具体的方策及び評価指標	経過・達成実績	達成度	次年度の課題と改善策	外部評価委員からの意見
1	質の高い教育の実行	1　これからの群馬県農林業を支える人材を育成する県内唯一の公立農業系高等教育機関で、実践学習を教育の基本としている。 2　課題解決型の研究に取り組み、主体的に学ぶ力を育んでいる。 3　1年次は全寮制とし、寮生活を通して規律・協調・思いやりの精神を育み、人間力を身につけている。 4　農林業の国際化や技術・情報の高度化、農業の6次産業化に対応できる技術の習得や組織活動等のマネジメント能力を養成するため、実践学習を強化し取り組み、経営力を身につけている。 5　国際水準GAPを教育カリキュラムに導入し、農場等での実習を通して、農業生産技術に加え国際感覚を兼ね備えた担い手を育成している。 6　平成31年3月に、新たな施設園芸経営の形を創造する拠点として「ぐんまイノベーションファーム」が農林大に設置された。IoTやICT、DXを活用した最先端の技術を授業に取り入れることにより、地域農業を牽引する優れた経営者の育成をめざすとともに、地域に開かれた実証モデル施設として最先端技術を発信している。 7　新型コロナウイルスのまん延により、新しい生活様式に対応した教育を実践している。	・学生にとって分かりやすい授業の実施	・授業評価に基づく授業方法の改善 R4：コース専門科目の授業アンケート （R3：教養科目・共通科目　）	・前期評価結果 「おおむね満足以上」 94% ・後期評価結果　　〃　　71% 平均　83% ・結果については、経営企画会議で結果の分析と対策を検討し、コース長・係長会議で報告した。		・授業評価に基づく授業方法の改善 R5：教養科目・共通科目の授業アンケート コース専門科目：前期15科目（7月）、後期18科目（1月）実施 授業改善に役立てるため担当講師に結果報告 職員会議で結果の分析と対策を検討（2月）	・後期に評価がダウンしているが、担当者の姿勢、学生の雰囲気など原因を分析できている。改善に向けた適切な対応である。継続していく必要がある。 ・実習が多いので、学生が主体的に動くようにならないと学習内容が身につかない。農業系の学校では、担当者が作って売ることに気を取られがちであるが、これは教育のための手段に過ぎない。なぜよく育ったとか育たなかったとかを教えていくことが大事である。
				・よりよい授業のための職員の資質向上 （職場研修、派遣研修） ・DXを活用した、効率的でより効果が高い指導方法の推進	・授業のすすめ方研修（4/18：新任指導職員等8名）を実施。 ・新規採用職員研修（5～8月：1名） ・刈り払い機安全研修（5/11：5名） ・ミライの農業をつくる指導者向け研修（Web）の実施（農水省）8～9月：担当者5名参加 ・ミライの農業をつくるオンライン講座（農水省）2月：野菜コース2年生13名 ・今年度の新規赴任者を対象に、アクティブラーニングの授業参観実施（2月） ・すべての教室でインタネットの環境が整ったため、約5割の授業でWEBを活用した授業を実施		・職員のスキルアップを目的に来年も職員研修を計画的に実施 ・ミライの農業をつくる指導者向け研修等実施。	
			・学生がやる気と自信の持てる教育	主体的に学ぶ力を育てる アクティブラーニング型の授業導入 （授業の1/3で実施） ・課題研究・意見発表等への取組の強化 （全国大会出場を目指す）	・授業のすすめ方研修（4/18：新任指導職員等8名）を実施 ・今年度の新規赴任者を対象に、アクティブラーニングの授業参観実施（2月）（再掲） ・課題研究中間検討会（7～10月：各コース） ※新型コロナウイルス対応のため職員動員が予定されていたことから、例年2回行っていたものを、コースの判断で1回以上の実施とした。 1回　野菜、花き・果樹、酪農肉牛、　2回　農と食、森林 ・校内課題研究発表会　11/24～25 ・代表課題研究発表会（群馬会館）　12/15 ・関東ブロックプロジェクト発表会（山梨県）　1/18～19 ・全国農業大学校等プロジェクト発表会・意見発表会　2/7～2/8 ※関ブロ大会の結果1名が全国大会へ出場し優良賞を受賞した。 ・意見発表、各種懸賞論文への応募 キャリアデザインⅠで作文・小論文指導（4回） 夏休みに1人1課題の作文を作成し、これをもとに、意見発表指導 10月　ヤンマー懸賞論文への応募（51名/59名：森林を除く） ※2名が奨励賞入賞		・課題研究と意見発表 来年度も計画的な指導により全国大会を目指す。 校内課題研究発表会（11/28・29） 代表課題研究発表会（12/14：群馬会館） 関東ブロックプロジェクト発表会（1月：千葉県） 全国プロジェクト発表会（2月未定） ・計画的に指導 ・ヤンマー懸賞論文への応募要領が厳格化され学校としての応募が難しくなったことから、5年度以降は個人応募とし、これまで夏休みの宿題として指導してきた論文については、意見発表用の論文として位置付け、指導を行う。 ・新たな取組として「みどり戦略学生チャレンジ」の実施	

番号	重点項目	現　　状	評 価 項 目	具体的方策及び評価指標	経過・達成実績	達成度	次年度の課題と改善策	外部評価委員からの意見
		8　5月2日に公布された「みどりの食料システム法」に基づき、県では、持続可能な農業（特に有機栽培）の取組を強化し、有機栽培に取り組む生産者の増加を目指すこととした。		・国際水準のGAPを実践 　各コースで農林大GAPの内部審査を実施 ・実習等におけるリスク管理意識の向上 ・スマート農業の実践 ・DX活用による効率的な農業の実践	・野菜コース露地野菜専攻で、ASIAGAPの更新審査を受検(9/26)。大きな指摘もなく、更新された。 ・3月上旬に各コース、就農支援係において校内GAP審査を実施予定。 ・6月の職員会議で、ヒヤリハット事例集をもとに注意喚起 ・イノベーションファームでの課題研究（13名） ・イノベーションファームへの他コース学生の受入れ（農食コースの課題別実習3名×30日間） ・他コース学生、研修生の視察受け入れ（農食コース12月、実践学校2月）農食コース ・ドローン研修　農食コース（7/21）、森林コース（11/17） ・ドローンを利用した課題研究（酪肉1名） ・農食コースでは、地域営農専攻8名が課題解決研究でKSAS（WEB上の営農管理システム）を活用 ・GPSトラクタ研修の受講　(31名） ・ラジコン草刈り機（23名）		・GAP 　野菜コース露地野菜専攻でASIAGAP更新審査実施 　他コースについても、農林大GAPに基づいた内部審査を行う。 　課題研究で取り組むなどして、学生、職員の意識を高める。 ・農作業安全月間等に合わせ、コース長会議で事例検討。 ・イノベーションファームの施設受入れにより、環境制御技術の県内農家への普及の一翼を担う。また、全コースを対象に視察を受入れ、スマート農業への理解を深めてもらう。 ・イチゴについて農業技術センターと共同研究の検討 ・先端技術の知識・技術習得を計画的に進める	・県内の高校でGAP認証を受けているのは勢多農林高校だけである。指導員資格取得は国の補助も出るため他農業系高校にも取得を呼び掛けている。勢多農林としては継続していくつもりである。農業現場では継続しない例もあるが、農林大は、今後も継続していくのか？ ・県内で初めてJGAPを取得したが、労力、経費を考えると個人農家での取得は難しい。 ・目指すのは循環型農業であり、畜産は切り離せない。水田機能もうまく連携しないといけない。 ・GAPは栽培管理についてはなにもうたっていない。食の現場では本来そこを重視すべき。 ・GAPの認証と実践は別に考える必要がある。管理手法という本来の目的を学んでアピールするところはアピールが必要。 ・スマート農業について、GPSトラクタ導入の目的と使用方法は？ 　→スマート農業の象徴としてGPSトラクタとドローンは分かりやすい。最先端農業を体験できるという学校の魅力をアピールする目的もある。実際の作業ではなく、機械化研修のなかで体験程度で使用。
				・6次産業化学習の強化 　販売学習、地域等と連携した商品開発、 　オリジナルパッケージ作成 ・有機栽培の担い手育成 　取組のためのロードマップ（計画）作成（研修部共通）。 　有機栽培者による講演会を実施	・イオンにおける販売学習（6/24、10/14、12/9） ・野菜コース　イチゴオリジナルパッケージ作成（1/30） ・農食コース　加工品販売用シール作成（2/8） ・農業構造政策課と「農林大グリーン化推進チーム」を立ち上げ、有機農業の実践教育について検討した。 ・令和5年2月21日に有機農業実践者（プレマ：飯野社長）による特別講演会を1年生を対象に実施した。 ・令和5年度農林大学校有機農業関連予算　69，800千円　確保 　※国庫事業の採択結果により縮小あり ・5年度の主な計画　　①研修部に有機農業コース新設 　　②「有機農業論」の講義を開始 　　③有機農場整備		・販売学習 　イオン高崎店での直売会　(3回) 　花と野菜苗の販売会（5/上） ・サツマイモ苗生産については、継続して実施 ・そば打ち検定に向けた技術指導 ・5年度の主な計画　　①研修部に有機農業コース新設 　　②「有機農業論」の講義を開始 　　③有機農場整備 ・6年度の主な計画　　①社会人コースに「有機農業専攻」を新設 　　②「循環型農業論」の講義を開始 　　③有機JAS認証取得	・生産者、消費者目線としてパッケージは大事。 ・1分間スピーチは大事である。学生のうちに身につけられれば社会で役に立つ。 ・代表課題発表会が新型コロナ対応として無観客で行われたため、視聴できなかったのが残念。学生が何にどのように取り組んでいるのか聞きたかった。 ・循環型農業は大事。 ・GAPによる安全作業、安全出荷など改めて学んでいかないとならないと感じた。 ・全国大会出場を果たせたのは、担当者の指導のおかげである。 ・農林大が有機農業に取り組むことは理解できるが、農林大が有機に突っ走ってしまわないかと同窓会から不安の声が上がっている。食料自給率が上がらない中で、生産の維持を考えると有機農業では実現できない。効率良い農業も大切である。耕作放棄地対策など優先事項があるのではとの意見があった。JAで有機部会を作ったが先細りとなった例もある。 　→今までの農業を否定するものではなく、有機も増やせていければ良いというスタンスである。教育の場はトップランナーと考えており、循環型農業の一つとして有機農業にも取り組んでいくと考えている。 ・同窓会からこのような意見があったと県庁につなげてもらいたい。
				・プレゼンテーション能力の向上 　1分間スピーチ ・基礎学力向上 　実習等で必要な学び直しの補講の実施 ・学業優秀者、生活態度優秀者等の表彰	・学年集会時（7/27）に実施（1・2年生） ・　〃　　（12/27、2/21）に実施（1年生） ・テスト（前期　4/12・13）を実施し、基準に達しない者と希望者を対象に本校職員による補講を実施した。 　1年生（20名）全8回、2年生（4名）全3回実施 ・テスト（後期　9/20）を実施し、基準に達しない者と希望者を対象に本校職員による補講を実施した。 　1年生（7名）全8回、2年生（5名）全3回の補講を実施 ・英語Ⅰ（希望者を対象に実施） 　前期：12回（4～7月）、11名 ・英語Ⅱ 　後期：12回（10～2月）、6名 ・各種褒賞等授与式で表彰（3月予定 ）		・継続して実施 ・継続して実施 ・各種褒賞等授与式で表彰（3月） 　学業成績優秀者 　生活態度優秀者	
			・社会生活の基本を身につける	・寮生活を通して規律、協調、思いやりの精神を育む教育の実践 ・心の健康相談の実施 ・学生、職員一体となったあいさつ運動の実施	・生活相談員による指導（通年） ・スクールカウンセラーによる支援（4～2月：22回　延べ71名） ・コースごとに新入生面談を実施（5月） ・1、2年生を対象に「教育相談のための総合調査（メンタル検査）」を実施（4月）し、個別対応を行った ・登校時における教育棟玄関での声かけ ・生活指導職員による登校時の声かけ ・職員からの積極的な声かけ		・生活相談員による指導（通年） ・スクールカウンセラーによる支援 ・校長面談、3者面談の実施 ・1、2年生を対象に「教育相談のための総合調査（メンタル検査）」を実施 ・継続して実施	

番号	重点項目	現　　状	評　価　項　目	具体的方策及び評価指標	経過・達成実績	達成度	次年度の課題と改善策	外部評価委員からの意見
			・地域、外部機関との連携	・地域貢献等 　箕輪城周辺の環境整備 　地元小学校との交流 　子ども食堂との連携による食育	・箕郷学校給食センターへキャベツ等の納入（4月～） ・子ども食堂へ食材の提供　31回 ・花き・果樹コースが箕輪小での花づくりを通し地域に貢献しているとして高崎北署から感謝状授与（5/16） ・箕輪小学校で花づくり講習（10/14） ・箕輪城まつり参加（学生自治会：10/30）		・学校給食、子ども食堂へ食材の提供・小学生への花づくり指導	
				・農業技術センターとの連携による害虫発生予察情報（果樹関係）の提供	・4月から週1回のペースで学生が果樹園内の害虫発生状況を調査し、農技センターに報告。		・害虫発生調査の連携	
				・イノベーションファームの活用 　農業技術センターとの連携による最新技術の実証と普及	・イノベーションファーム 　農業者等視察受入（7回：88名） 　農業技術センターとの連携試験として「バラ灰色カビ及びうどんこ病における省力・減化学農薬防除技術実証」のための会議（2回）、実績検討会（3/10） 　農業農村振興計画西部地域重点プロジェクトC（やよいひめ振興）について普及指導課等との検討会の実施（3/14）		・バラについては農業技術センターとの連携を継続 ・イチゴについて農業技術センターと共同研究の検討（再掲） ・プロジェクトCでは、イノベーションファームを活用し、やよいひめにおける施肥基準の検討を行う	
					・県立学校公仕研修会（総合教育センター主催）の受入れ（8/5）47名 ・伐倒練習機を活用した林業労働安全研修（森林組合連合会主催）の受入れ(2回)		・森林組合連合会主催の林業労働安全研修の受入れ	
				・農林大学校創立100周年記念事業に向けた準備	・第8回100周年記念事業実行委員会（5/20） ・第9回100周年記念事業実行委員会（9/16） ・創立100周年記念式典開催（10/21）参加者320名 ・第10回100周年記念事業実行委員会（1/23）		・創立100周年記念事業の最終事業としてマイクロバス贈呈式の実施	
			・教育環境の充実	・DX活用による効果的な学習の実践	・4年度から教育棟教室でWi-Fi環境が整ったことから、インターネットを活用した授業を進めた。		・DX化に対応した人材育成を進める。	
				・ICTを生かした新たな授業方法の展開	・すべての教室でインターネットの環境が整ったため、約5割の授業でWEBを活用した授業を実施（再掲）			
				・Webによる発表会や就職試験等への対応強化	・ミライの農業をつくるオンライン講座（農水省）2月：野菜コース2年生13名（再掲）			
				・寮における学習環境の改善	・寮舎監室前フロアーにプリンターを設置（4月） ・寮内でのWi-Fiの活用		・継続して実施	
					・農林大PDCAの実践 　本校で実施している主要なイベントをより良いものとするために、開催後の反省、意見出し、それに対する改善策の検討を行った。			
				・キャンパスの環境美化	・全校学生による定期的な環境整備を実施		・毎月学生、職員で清掃を実施 ・花壇の整備	
			・新型コロナウイルスに対応した学校運営	・授業の継続を基本に、警戒度等に応じた指導体制の見直しや教育環境、施設環境の整備	・新型コロナウイルス対策マニュアル見直し（随時）		・5月に予定されている5類引き下げに伴い、新年度からの対応について検討する	・今年度、新型コロナウイルスにより小・中・高校では学級閉鎖、学年閉鎖が頻発した中で、寮があるにも関わらず、感染者が65名と非常に少なかったことは対策が適正に行われていたとして評価できる。
					・陽性者が確認された場合に濃厚接触者を速やかに判断するための手順の検討を行った。			
					・寮生に感染者、濃厚接触者等が発生した際に、速やかに一般学生と隔離するため、研修館に一時利用部屋を確保し活用した。			

番号	重点項目	現　　状	評　価　項　目	具体的方策及び評価指標	経過・達成実績	達成度	次年度の課題と改善策	外部評価委員からの意見
		（数値目標と評価）		◎学生の授業満足度評価 「おおむね満足」以上　80%以上	・前期　専門科目：16科目実施 「おおむね満足」以上　94% ・後期　専門科目：17科目実施 「おおむね満足」以上　71% ・前後期平均　「おおむね満足」以上　83%	A		
				◎ｱｸﾃｨﾌﾞﾗｰﾆﾝｸﾞ型授業の導入 8科目（各コース1科目以上）	前期　9科目 後期　20科目	A		
				◎課題研究・意見発表で全国大会出場 1名以上	課題研究で1名（農食コース）が全国大会に出場し優良賞を受賞	A		
				◎懸賞論文等への応募者（森林コース除く） 1年生　100%	86%　（51名/59名：森林を除く）	B	・ヤンマー懸賞論文への学校としての応募は応募要領が厳格化され難しくなったことから、6年度以降は個人応募とし、これまで夏休みの宿題として指導してきた論文については、意見発表用の原文として位置付け、指導を行う 【R5年度数値目標及と評価】 ◎みどり戦略学生チャレンジの実施	

番号	重点項目	現　　状	評　価　項　目	具体的方策及び評価指標	経過・達成実績	達成度	次年度の課題と改善策	外部評価委員からの意見
2	実績の上がる学生募集の実行	1　少子化により減少傾向であった入校生も、HPの更新や学生募集の強化、PRによりここ数年8割程度を確保している。(平成31年度86名、令和2年度83名、令和3年度78人、令和4年度82名：定員100名) 2　近年の入校生の状況は、非農家出身者が増加傾向であったが、令和4年度は68%(令和2・3年度は約76%)に減少した。 3　本校入校生の約6割が農業高校出身者(令和4年度入校生：61%)であり、農業高校との連携とともに、普通高校へのPRが重要となっている。 4　新型コロナウイルスのまん延により、これまでのようなPR活動が難しいため、新しい生活様式に対応した効果的な方法を検討する必要がある。	・農林大学校のPR	・新型コロナウイルス警戒レベル等に対応したオープンキャンパスの開催	・7/28、8/3/、9/3の午前・午後に県内高校在籍者及び県内在住者を対象に計6回実施。76名が参加。 ・県外高校生を対象とした学校見学　6名(8月5名、9月1名)		・魅力あるオープンキャンパスの開催 (学生が中心になった開催) ・学生と職員による実行委員会の設置 (ガイダンス・トラクタ・校内見学・相談コーナー・コース体験) ・7/26、8/8については、体験型を取り入れて実施。9/2は、本年度同様午前・午後2回の説明会。	・5年度受験者数が62名とのことだが、高校になってからいきなり農家に興味を持てと言っても無駄。小・中学校からの食農教育や動植物とのふれあい教育が大事である。国を挙げて対策しないといけない。 ・外部資本での参入は地域の担い手につながりにくい。農村で育った人間、都会の人でも農林大のようなところで学び直しをしっかりと行った人でないと地域の担い手になりづらい。 ・勢多農林高校でも、入校者が減少している。特に資源動物は、現在の鳥インフルや豚熱の影響、素牛価格の下落、飼料の高騰など厳しい背景もあり希望者が減少したと考えられるが、ここまで減少することは想定外であった。現在、公立高校の定員割れが起きている。今後、中学生以下が減少し、専門高校離れが加速する見込みである。どうやって農業に興味関心を持たせるかが課題。普通校や私学へのPRも重要である。農業関係者がいろいろな発想をもって議論する必要があるのでは。
				・県内高校への学生募集訪問 幹部職員等による学校訪問(7月・9月)	・7月および9月に、農業系高校10校(幹部職員)、中堅進学高校等33校(管理職・教務係)を訪問 ・高校等進路説明会参加(3月末まで24回) 5/17進路指導主事研修会　5/25富実　6/2利根実　6/3藤北 6/10大泉　6/14勢多　6/15吾中　6/16藤中　9/5育英 9/9新田　9/13吾中　9/20勢多　9/21桐生清桜　9/13吾中 11/8嬬恋　12/7吾中　12/14農林業チャレンジセミナー 12/21渋川・沼田合同　12/21吉井　1/23常盤 2/2新田　3/10新島　2/22勢多農　3/23玉村 ・推薦および一般試験(前期)の受験者が大幅に減少したことから、後期試験の願書受付開始に合わせ、12月から1月にかけ、コース長以上が37校を訪問し説明を行った。		・計画的に実施	
				・情報発信の強化 学校案内やホームページによるPR (スマホ対応型への移行) イノベーションファームの活用 (最新技術が学べる施設のPR)	・学校案内を3,500部作製し、順次配布 ・ホームページ更新　61回 ・イオン販売会での学校案内配布(6/24、10/14、12/9) ・イノベーションファーム視察対応(7回：88名)(再掲)		・継続して実施 ・イノベーションファームについては、県内施設園芸農家への情報提供の場として、引き続き積極的な視察対応を行う。	
				・全寮制に対する不安解消 在校生から寮生活の楽しさを伝える (学生メッセージを送付)	・1回目　7月　9校　10名 ・2回目　12月　5校　8名		・継続して実施	
			・農業高校等との連携強化	・連携会議等を通じた情報交換 農業高校の担任等へのPR強化	・高等学校職員による農林大学校見学研修会(6/30) 13校　17名 ・学校教育と行政との連絡会議(9/9)　8校　14名 ・安中総合学園高等学校の学校評議員会への校長出席(7/21、1/21) ・次代を担う職業人材育成事業「就農者育成連携推進協議会」への校長出席(9/7、2/3) ・安中総合学園高等学校へ有機農業の調査実施(5/19)		・継続して実施 ・連携強化	
				・学校見学会の積極的な受入れ	・安中総合(6/16)　40名 ・大泉(10/27)　40名 ・富岡実業(11/4)　9名 ・吾妻中央(2/27)　18名		・随時実施	
				・職員派遣講義による高・大連携の強化	・前橋清陵(9/9)　30名 ・新田暁(11/4)　30名 ・富岡実業(1/18)　37名 ・伊勢崎興陽(3/3)　19名		・継続して実施 ・コース担当者による出前授業の実施 ・OBによる高校訪問	
				・全寮制に対する不安解消(再掲) 在校生から寮生活の楽しさを伝える (学生メッセージを送付)	・1回目　7月　9校　10名 ・2回目　12月　5校　8名			

番号	重点項目	現　　状	評　価　項　目	具体的方策及び評価指標	経過・達成実績	達成度	次年度の課題と改善策	外部評価委員からの意見
		（数値目標と評価）		◎オープンキャンパス 参加者数　実参加者120名 参加者の満足度評価 「おおむね満足」以上80%以上	・オープンキャンパス 実参加者　76名 アンケート結果　おおむね満足以上　98% （満足　73%、おおむね満足　25%）	C・A	・5類引き下げ後の対応について検討する。	
				◎高校訪問　43校　2回実施	43校　3回実施	A		
				◎HPの更新回数　100回以上 動画の配信　10回	・ホームページ更新　61回 ※動画については、システム上困難なため実施せず	C	・評価項目、目標値の検討必要	
				◎入校生の確保　80名以上	59名	C		

番号	重点項目	現　　状	評　価　項　目	具体的方策及び評価指標	経過・達成実績	達成度	次年度の課題と改善策	外部評価委員からの意見
3	実績の上がる進路指導の実行	1　令和3年度卒業生77人の進路決定率は100%で、内訳として、雇用を含んだ就農が26人（34%：前年29%）、JA等農林業関係団体14人（18%：同25%）、民間企業が23人（30%：同31%）、公務員合格者12人（16%：同11%）、進学2人（3%：同8%）だった。就農割合の増加と、公務員が12名と多かったことが特徴である。 2　森林コースを除く就農率は、令和元年度に26%と低かったもののその後増加し、令和3年度は、42.6%まで回復した。なお、令和3年度の雇用就農率は65%である。 3　経営者としての能力を高めるため、社会に出て経験を積んだ後に就農する学生もいる。 4　近年、林業への就業率は60%を超えている。特に森林組合への就業者は増加しており、林業の担い手として期待されている。 5　新型コロナウイルスの影響により、企業等の経営が厳しい状況であり、採用への影響が危惧される。	(1年生) ・進路希望の把握と進路指導体制の強化	・進路方向の決定と進路別指導 個別面談 希望調査 ・進路ガイダンスによる指導（2回） ・就農・就業の促進 農林業法人説明会の開催（9月） ・社会人としてのマナーアップ講座等の開催（2月） ・就農、就業（林業）への支援 農業法人、森林組合への理解を深める ・海外研修への参加誘導 ・農業次世代人材投資資金（準備型）及び緑の青年就業準備給付金の活用	・コースごとに新入生面談を実施（5月） ・全1年生を対象に校長面接（10月） ・コースごとに三者面談を実施（11～12月） ・進路希望調査の実施（12月・3月予定） ・進路ガイダンス　2回（4・12月） ・キャリアデザインⅠで進路指導（14回） 進路・ライフプランを考える 作文・スピーチ指導 雇用状況・労務管理 ストレスマネジメントなど ・農林業法人等説明会（9/14：県内10法人）　参加者 84名 ・就職活動が前倒し傾向なことから、新たに「就職活動スタートセミナー」を実施（2/24） ・群馬県職員採用説明会の実施（2/24） ・1年生を対象に市内紳士服専門店担当者によるマナーアップ講座を実施（2/21） ・農業法人説明会（9/12：1社）　参加者 6名 ・農林業法人等説明会（9/14：県内10法人）　参加者 84名（再掲） ・農業次世代人材投資資金（準備型） 校内説明会（4月）：受給者 1名 ・緑の青年就業準備給付金 コース内説明会（5月）：受給者 2名		・コースごとに新入生面談を実施（5月） ・全1年生を対象に校長面接（11月～12月） ・コースごとの三者面談（12～1月） ・進路希望調査の実施（12月・3月） ・継続して実施 ・継続して実施 ・継続して実施 ・農業法人等説明会、マナーアップ講座等の計画的な開催 ・就農、就業支援 ・特別講演会(六次産業化)の開催 ・海外留学経験者による説明会（農業会議） ・給付金申請支援	

番号	重点項目	現　　状	評　価　項　目	具体的方策及び評価指標	経過・達成実績	達成度	次年度の課題と改善策	外部評価委員からの意見
		6　企業の求人方法、会社説明会、入社試験が、紙、対面からWebを利用したものに急速に変わりつつある。	(2年生) ・きめ細やかな進路別指導	・就農者、雇用就農者、就業者への支援 　農業法人の情報収集と分析指導 　就農・就業に向けた学内企業説明会の開催(9月) 　関係機関との連携強化(ハローワーク等) 　農業法人協会、農業経営士、農村生活アドバイザーとの連携 ・海外研修への参加誘導 ・就業後の職場定着に向けた取組 ・新型コロナウイルス禍における就活指導 　Webによる企業説明会、面接等の指導 ・農業次世代人材投資資金(準備型)及び緑の青年就業準備給付金の活用 ・就職活動状況の把握と支援	・5～6月　全2年生に対し校長面談実施 ・就農支援 　農業法人説明会(9/12:1社)　参加者 6名(再掲) 　農業法人等説明会(9/14:2年生は希望者対象)(再掲) ・就職支援 　面接試験対策として、各コース職員および校長による面接練習を随時実施 ・キャリアデザインⅡにおいて、農村生活アドバイザー1名による講義。農業経営士は新型コロナウイルスの影響により中止 ・酪肉コース1名が米国留学内定(国際農業者交流協会) ・各コースで随時指導 ・農業次世代人材投資資金(準備型) 　　校内説明会(4月):受給者 1名 ・緑の青年就業準備給付金 　　コース内説明会(5月):受給者 1名 ・隔週開催のコース長会議において、内定状況の把握。 ・面接試験対策として、各コース職員および校長による面接練習を実施(随時)(再掲) ・本年度から、学生玄関に「就職内定おめでとう」コーナーを設置し、早い時期からの就活意欲向上を目指した。		・就農、就業支援 ・継続して支援 ・給付金申請支援 ・継続して実施	・面接練習とかよくやっている。 ・イチゴでの雇用就農が増えているが、独立目的か。 　→非農家出身者多いが、独立を目指している者も多い。
			・専門資格取得教育の強化	・補講の実施 　毒物劇物取扱者 　危険物取扱者(乙４類) 　日本農業技術検定2級 　他	・応用化学Ⅱ(補講)(4回:25名) ・応用化学Ⅰ(補講)(8回:35名) ・危険物取扱者(乙４類)　受験者数25名　合格者数6名　合格率24%(前年20%) ・農業技術検定2級　各コースで補講 　第1回　受験者数　66名　合格者数　16名　合格率　24% 　第2回　受験者数　24名　合格者数　　3名　合格率　13% 　合計　受験者数　90名　合格者数　19名　合格率　21% ※　農業技術検定２級優秀団体賞受賞(1/25)		・応用化学の補講により、毒劇、危険物免許取得の支援を行う。 ・日本農業技術検定については、コースで補講を行う。 ・毒物劇物取扱者、危険物取扱者乙4、狩猟(わな猟)免許等の取得に向け積極的な支援を実施。	
		(数値目標と評価)		(2年生) ◎進路決定率　　100%	進路内定率　　91%(3/2)　前年同時期 95%(2/25)	B		
				◎就農率　　40%以上	就農率　　37%　(森林コース除く)　32%(全体)	B		
				◎林業関係の就業率　60%以上	林業関係就業率　64%	A		
				◎日本農業技術検定(2級)の資格取得者割合　30%以上	合格率　　21%	C		
				◎合格率 　毒物劇物取扱者　　30%以上 　危険物取扱者(乙4類)　30%以上 　農業機械系資格　　100% 　狩猟(わな猟)免許　100%	毒物劇物取扱者　　9% 危険物取扱者(乙4類)　24% 農業機械系資格　　100% 狩猟(わな猟)免許　　100%(森林)	B		

<table>
<tr><th>番号</th><th>重点項目</th><th>現　　状</th><th>評 価 項 目</th><th>具体的方策及び評価指標</th><th>経過・達成実績</th><th>達成度</th><th>次年度の課題と改善策</th><th>外部評価委員からの意見</th></tr>
<tr>
<td>4</td>
<td>県民の期待に応えられる研修の実行</td>
<td>1　令和3年度の農業実践学校は、定員136名を超える171名の応募があり、書類選考と面接により131名の入校が決定した.。新型コロナウイルス対応のための職員減や緊急事態宣言中の分散研修もあったが、124名が修了した。なお、野菜専門技術課程の修了生は、全員が営農計画を策定し就農することができた（予定含む）。また、修了3年後（平成30年度実践学校各課程修了者）の就農状況は、88%の方が農業に従事している。

2　農業機械研修は、大型トラクター免許取得研修、作業機械研修、安全研修等を実施している。そのうち免許取得研修は、新規導入トラクターの効率的な運用により、日数を短縮して実施している。なお、道路運送車両法の運用緩和により、免許取得研修の希望者が多くなっている。

3　令和3年度の公開講座は、前後期で対象を野菜に絞った3講座を予定していたが、 新型コロナウイルス対策の影響で全て中止となった。令和4年度は、下期に感染状況を考慮して1回開催する。

4　5月2日に公布された「みどりの食料システム法」に基づき、県では、持続可能な農業（特に有機栽培）の取組を強化し、有機栽培に取り組む生産者の増加を目指すこととした。（再掲）</td>
<td>・多様な研修ニーズに対応した「ぐんま農業実践学校」の運営</td>
<td>・新型コロナウイルス対策を講じた研修の実施

・研修生の確保に向けた取り組み
ニーズに対応した課程の充実

・有機栽培の担い手育成
取組のためのロードマップ（計画）作成（農林部共通）。

・有機栽培ほ場整備に向けた準備

・就農に向けた体系的な研修の実施
各課程の修了者について就農状況調査を実施

・JA等と連携した担い手の育成
JA、市町村への実践学校PR</td>
<td>・新型コロナウイルス感染症対策指針に従い対策を徹底

単位：人
<table><tr><th>課程</th><th>定員</th><th>応募者</th><th>入校者</th><th>修了者</th></tr><tr><td>野菜専門技術課程</td><td>20</td><td>31</td><td>20</td><td></td></tr><tr><td>野菜基礎技術課程</td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td>春夏野菜平日コース</td><td>22</td><td>25</td><td>22</td><td>19</td></tr><tr><td>〃　日曜コース</td><td>22</td><td>31</td><td>22</td><td>21</td></tr><tr><td>秋冬野菜平日コース</td><td>22</td><td>25</td><td>22</td><td>18</td></tr><tr><td>〃　日曜コース</td><td>22</td><td>25</td><td>22</td><td>21</td></tr><tr><td>推進品目課程</td><td>10</td><td>9</td><td>9</td><td>8</td></tr><tr><td>トラクター操作講座</td><td>10</td><td>12</td><td>12</td><td>11</td></tr><tr><td>農業体験講座</td><td>8</td><td>6</td><td>6</td><td>6</td></tr><tr><td></td><td>136</td><td>164</td><td>135</td><td></td></tr></table>
・本年度の研修生は、研修終了後に、96%が就農予定
・令和元年度修了の研修生（修了3年後）を対象としたアンケートでは就農率が91%.

・従来のコースの募集（各JA、市町村へパンフレット等の配布とホームページによるPR）を1月から実施。
・有機農業コースの募集を3月から開始</td>
<td></td>
<td>・5類引き下げ後の対応について検討する
・感染予防対策の継続
・感染予防対策として、バス使用を控えていたが、次年度は感染状況により、農家（研修生OB）への視察研修を実施する

・有機農業コースの新設
（半年間、毎週木曜日、定員20名）
春夏平日、秋冬平日コース、推進品目課程を廃止する
・有機農業コースの募集、選考、6月からの開校準備
有機農業コースのほ場20aの栽培管理、農業機械等の導入

・修了時と3年後の調査を実施

・研修生確保に向けJA、市町村との連携を継続する</td>
<td>・直売程度の農家になる人が多いと思うが、専業農家の育成もできるようになるとよい。
→専門コースは70日間の研修なので、専業の方も多い。
・研修生同士のネットワークができるのが大きな成果である。</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>・県民ニーズに対応した農業機械研修の実施</td>
<td>・新型コロナウイルス対策を講じた研修の実施

・農業機械研修の計画的な実施と運転免許の取得
免許取得研修の効率化

・スマート農業機械を用いた研修

・農作業安全研修等の実施
就農者育成のため、農業事務所、JA等と連携した研修の実施</td>
<td>・新型コロナウイルス感染症対策指針に従い対策を徹底

・取得希望者の増加への対応として、農業者等対象大型トラクター基礎研修実施回数を増加　(5→7回)
・班分けにより受講時間の短縮
大型トラクターけん引研修　(2回／26名)
大型トラクター基礎研修　(11回／167名)

・下記安全研修やトラクター基礎研修内でスマート農業機械を用いた研修も平行して実施　9回

・運転免許講習にて安全研修を実施 8回
・学生等に機械安全研修を実施　9回
・就農者育成研修として実施　5回</td>
<td></td>
<td>・5類引き下げ後の対応について検討する

・農業者対象のけん引研修は、新型コロナ感染症対策のため職員が動員されたことから、募集人員を減らしたが（2回・6名）、次年度は増やす予定（2回・36名）
・大型トラクター基礎研修は10回（学生5回、一般5回）実施予定

・農作業安全研修とスマート農業機械を用いた研修を継続して実施</td>
<td>・安全講習もしっかりと行ってほしい。
→農林大は、唯一安全講習もできる機関として重要な役割である。</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td>・農林業に対する理解を深める公開講座の開催</td>
<td>・新型コロナウイルス対策を講じた講座の実施

・職員の専門性を生かした講座の実施</td>
<td>・新型コロナウイルス感染状況により、上期の農と食のふれあい講座（果菜類の仕立て方、秋冬野菜づくり）の開催は中止。

・下期は当初計画より1講座増やし2講座を実施。
春夏野菜づくり　2/21（22名）　刈り払い機の基本操作（3/15）</td>
<td></td>
<td>・次年度は7講座実施予定。</td>
<td></td>
</tr>
</table>

番号	重点項目	現　　状	評　価　項　目	具体的方策及び評価指標	経過・達成実績	達成度	次年度の課題と改善策	外部評価委員からの意見
		（数値目標と評価）		◎実践学校研修生の満足度評価 「おおむね満足」以上　90%以上	評価「おおむね満足以上」 96%（修了課程の平均）	A		・達成度99%でB評価は厳しい。 ・達成したものは、評価項目の視点を組み替えてもよいのでは。
				◎実践学校研修生の定員確保 100%	99%（入校者135名／定員136名）	B		
				◎実践学校修了時の就農率 野菜専門技術課程　100% 実践学校全体　95%	96%（修了課程の平均）	A		
				◎実践学校修了3年後の農業従事率 80%	農業従事率 91%	A		
				◎大型特殊自動車免許等取得 合格率　100%	合格率 100%／1月末	A		
				◎スマート農業機械研修の開催回数と受講者数　17回／188名	受講者数 9回／118名／1月末	C		
				◎農業機械安全研修の開催回数と受講者数　20回／200名	受講者数 22回／312名／1月末	A		
				◎公開講座受講生の満足度 評価「おおむね満足」以上 90%以上	評価「おおむね満足以上」91%　（修了講座）	A		